

Commentez en japonais le texte suivant :

この一節は1949年に発表された三島由紀夫の小説『仮面の告白』の書き出しです。この文章を形成しているそれぞれの要素を分析して作者の感覚と文体の特徴を明らかにしてみてください。

永いあいだ、私は自分が生れたときの光景を見たことがあると言いつ張っていた。それを言い出すたびに大人たちは笑い、しまいは自分がからかわれているのかと思つて、この蒼ざめた子供らしくない子供の顔を、かるい憎しみの色さした目つきで眺めた。それがたまたま馴染みの浅い客の前で言ひ出されたりすると、白痴と思われかねないことを心配した祖母は険のある声でさえずり、むこうへ行つて遊んでおいでと言つた。

笑う大人は、たいてい何か科学的な説明で説き伏せようとしたのが常だった。そのとき赤ん坊はまだ目が明いていないのだとか、たとい万一明いていたにしても記憶に残るようなはつきりした觀念が得られた筈はないのだとか、子供の心に呑み込めるように碎いて説明してやろうと息込むときの多少芝居がかつた熱心さで喋りだすのが定石だった。ねえそうだろう、とまだ疑ぐり深そうにしている私のちいさな肩をゆすぶっているうちに、彼らは私の企らみに危うく掛るところだったと気がつくらしかった。子供だと思つていると油断ができない。こいつ俺を騙しかけて「あのこと」をきき出そうとしているにちがいない、それなら何だつてもつと子供らしく無邪気に訊けないものだろう、「僕どこから生れたの？ 僕どうして生れたの？」と——彼らは、あらためて、黙つたまま、何のせいかしらずひどく心を傷つけられたしるしの薄ら笑いをじつとりとうかべたまま、私を見やるのが落ちだった。

しかし、それは思ひすごしというものである。私は「あのこと」などについて何を訊きたいわけでもなかった。それでなくても大人の心を傷つけることが怖くてならなかった私に、騙をかけたたりする策略のうかんでくる筈がなかった。

どう説き聞かされても、また、どう笑い去られても、私には自分の生れた光景を見たという体験が信じられるばかりだった。おそらくはその場に居合わせた人が私に話してきかせた記憶からか、私の勝手な空想からか、どちらかだった。が、私には一箇所だけありありと自分の目で見たとしか思われなところがあった。産湯を使われた盥のふちのところである。下したての爽やかな木肌の盥で、内がわから見ていると、ふちのところにはんわりと光りがさしていた。そここのところだけ木肌がまばゆく、黄金でできているようにみえた。ゆらゆらとそこまで水の舌先が舐めるかとみえて届かなかつた。しかしそのふちの下の水は、反射のためか、それともそこへも光りがさし入っていたのか、なごやかに照り映えて、小さな光る波同士がたえず鉢合せをしているようにみえた。

——この記憶にとつて、いちばん有力だと思われた反駁は、私の生れたのが昼間ではないというところだった。午後九時に私は生れたのであつた。射してくる日光のあろう筈はなかつた。では電燈の光りだったのか、そうからかわれても、私はいかに夜中だろうとその盥の一箇所だけに日光が射していなかつたでもあるまいと考える背理のうちへ、さしたる難儀もなく歩み入ることができた。そして盥のゆらめく光りの縁は、何度となく、たしかに私の見た私自身の産湯の時のものとして、記憶のなかに描寫した。

震災の翌年に私は生れた。

その十年まえ、祖父が植民地の長官時代に起つた疑獄事件で、部下の罪を引受けて職を退いてから(私は美辞麗句を弄しているのではない。祖父がもつていたような、人間に対する愚かな信頼の完璧さは、私の半生でも他に比べられるものを見なかつた。)私の家は殆ど鼻歌まじりと言いたいほどの気楽な速度で、傾斜の上をこりだした。莫大な借財、差押、家屋敷の売却、それから窮迫が加わるにつれ暗い衝動のようになりますますますもえさかる病的な虚榮。——こうして私が生れたのは、土地柄のあまりよくない町の一角にある古い借家だった。こけおどかしの鉄の門や前庭

や場末の礼拝堂ほどにひろい洋間などのある・坂の上から見ると二階建てであり坂の下から見ると三階建ての・楕んだ暗い感じのする・何か錯雑した容子の威丈高な家だった。暗い部屋がたくさんあり、女中が六人いた。祖父、祖母、父、母、と都合十人がこの古い算筒のようにきしむ家に起き伏していた。

祖父の事業慾と祖母の病氣と浪費癖とが一家の悩みの種だった。いかがわしい取巻き連のもつてくる絵図面に誘われて、祖父は黄金夢を夢みながら遠い地方をしぼしぼ旅した。古い家柄の祖母は、祖父を憎み蔑んでいた。彼女は狷介不屈な、或る狂おしい詩的な魂だった。癩疾の脳神経痛が、遠まわしに、着実に、彼女の神経を蝕んでいた。同時に無益な明晰さをそれが彼女の理智に増した。死にいたるまでつづいたこの狂燥の発作が、祖父の壮年時代の罪の形見であることを誰が知っていたか？

父はこの家で、かよわい美しい花嫁、私の母を迎えた。

大正十四年の一月十四日の朝、陣痛が母を襲った。夜九時に六五〇匁の小さい赤ん坊が生れた。フランネルの襦袢・クリームいろの羽二重の下着・お召の餅の着物を着せられたお七夜の晩、祖父が一家の前で、奉書に私の名を書き、三方の上ののせ、床の間に置いた。

髪がいつまでたっても金色だった。オリヴ油をしじゅうつけているうちに黒くなった。父母は二階に住んでいた。二階で赤ん坊を育てるのは危険だという口実の下に、生れて四十九日目に祖母は母の手から私を奪い取った。しじゅう閉て切った・病氣と老いの匂いにむせかえる祖母の病室で、その病床に床を並べて私は育てられた。

生れて一年たつたかたにぬに、私は階段の三段目から落ちて額に傷を負った。祖母は芝居へ行っており、父の従兄妹たちが母もともどもに息抜きにさわいでいた。母がふと二階へ物をとりに行った。その母を追って行って、おひきずりの着物の裾がひっかかって、落ちたのである。

歌舞伎座へ呼出しがかけられた。祖母はかえって来て玄関に立ったまま、右手の杖に体を支えて、出迎えた父をじっと見つめたまま妙に落着いた一字一字を彫りつけるような口調で言った。

「もう死んだのかっ？」

「いいや」

祖母は巫子のような確信のある足取りで家へ上って来た。……

——五歳の元日の朝、赤いコーヒー様のものを私は吐いた。主治医が来て「受けあえぬ」と言った。カンフルや葡萄糖が針差のように打たれた。手首も上臍も脈が触れなくなつて二時間がすぎた。人々は私の死体を見た。

経帷子や遺愛の玩具がそろえられ一族が集まった。それから一時間ほどして小水が出た。母の兄の博士が、「助かるぞ」と言った。心臓の働らきかけた証拠だといふのである。ややあつて又小水が出た。徐々に、おぼろげな生命の明るみが私の頬によみがえつた。

その病氣——自家中毒——は私の脳疾になった。月に一回、あるいは軽いあるいは重いそれが私を訪れた。何度となく危機が見舞った。私に向つて近づいてくる病氣の聲音で、それが死と近い病氣であるか、それとも死と疎遠な病氣であるかを、私の意識は聴きわけるようになった。